Tsunagu

［つなぐ］

OCTOBER 2021　土屋よういち後援会報　vol.01

つながる文化、ひろがる経済。

北国街道（上田市柳町）

2021年、いよいよ任期終盤にさしかかった土屋市政。大規模災害やコロナ禍など、誰もが予想だにしなかった緊急事態に直面し、つねに難しい舵取りを迫られてきました。また私たちの暮らしも大きく変わり、いま改めて、これまでの常識や価値観を見直して再定義する必要が出てきたように思えます。

私たちはこれからどこに向かっていくべきか。どんなまちで、どんなふうに暮らしていきたいのか……。先の見えにくいこんな時代だからこそ、明るい未来と地域に活力を取り戻すための確かなヴィジョンが求められているのかもしれません。

土屋陽一市長にこれまでの取り組みとこれからのまちづくりについてうかがいました。

（2021年8月11日取材）

上田市長

土屋　陽一 さん

1956年10月28日生まれ。上田市出身。地元上田高校から早稲田大学第一文学部へ進学。卒業と同時に帰郷し上田市職員へ。その後、市議会議員となり、2018年上田市長に当選、現在に至る。座右の銘は「為政以徳」。漢詩鑑賞や俳句作り、歴史探訪が趣味。

interviewer

土屋　浩美 さん

エディトリアルディレクター。1998年、結婚を機に都内から上田市へ移住。地元情報誌の編集長を務めるかたわらインタビューやライティングを行なう。

地の利を活かし
人が集まり文化をつくる

シャトー・メルシャン 椀子ワイナリーのぶどう畑（上田市丸子地区陣場台地）

どうなるコロナ禍
暮らし、経済、ワクチンは？

2018年4月に市長に就任して4年目。この間、台風19号による災害や新型コロナウイルスなど想像を超える災禍が立て続けに起こり、当初の計画どおりに市政を進めることが難しかったかと思います。厳しい状況のなか、まずコロナ対策についてはどう取り組んでこられたのでしょう。

昨年の新型コロナウイルス感染拡大以降、上田市民の命と暮らしを守ることを最優先に考え、全力で取り組んできました。

コロナ禍の収束にはまず、ワクチン接種による集団免疫確保がカギと考え、医師会等にご協力いただきながら、市職員一丸となってワクチン接種を実施しているところです。

上田市の接種率ですが、8月1日時点で65歳以上の接種希望者のうち88.9％がすでに1回目の接種を終えました。これは人口10万人超の都市としては比較的速いほうです。いまは国の方針を受けて、12歳から64歳までの希望者のうち基礎疾患のある人から優先的に接種を進めています。

また国は当初、上田市内の基礎疾患のある方を約1万2000人と見込んでいましたが、実際は8000人ほどでしたので、こちらの余剰ワクチン4000人分もムダにしないよう工夫しながら柔軟に対応しています。

たとえば保育園・幼稚園・学校の教職員、警察官、消防団員、そして受験を控えた高校三年生のうち接種を希望される方々に向けても、予約可能券をおだしています。

今後の目標は、国からのワクチン供給量にもよりますが、県の大規模接種や職域接種もあわせて、今年11月末までには12歳から64歳までの希望者全員への接種を完了させたい考えです。

暮らしについては、コロナ禍で生活が困窮した家庭などに向けて、7月から「自立支援金」支給制度を開始しました。

昨年度は、児童一人当たり1万円の給付やひとり親世帯向けの特別給付などを行ないましたが、より暮らしの実情をふまえた支援が必要だと考えて、今年度は児童一人当たり5万円の給付（支給対象世帯）を実施しています。

地域経済に対しては、県と連携した支援のほか市単独による支援策などにも取り組んできました。資金繰りを支援するため、融資の際の利率引き下げ、2年間の実質無利子化、信用保証料の補助などさらなる充実を図っています。

とくに深刻なダメージを受けている観光関連事業者には、たとえば宿泊予約がキャンセルされた場合、1人あたり2000円の補助金をだすといった支援も行ないました。

同じくダメージの大きな飲食関係とそれに関連する小売業等の事業者へは、消費喚起のためにテイクアウト事業をサポートしたり、現金接触を回避できるようスマホ決済アプリの普及などにも努めました。

これからも社会情勢を注視しながら、市民に寄り添った取り組みを検討し、着実に進めていきます。

テレワークが加速化
働き方、学び方はどう変わる？

コロナ禍によってテレワークが一気に加速しましたが、上田市における働き方や学び方はどう変わっていくのでしょうか。

テレワークの普及に向けては、身近なところでも多くの会議をウェブ上でできるようさまざまな取り組みや支援を行なっています。

またテレワークの本拠地として、上田リサーチパーク内にある既存の上田市技術研修セ

ンターを一部改修し、通信ネットワーク環境を整備しました。ここを地域の働く場やワーケーションを推進する拠点として、地域の活性化に役立てていきたいと考えています。

また文科省が主導する「GIGAスクール構想」の実現に向け、昨年中には市内小中学校の生徒全員に1台ずつ、タブレット端末を支給しました。今年4月からはそれを活用した授業がすでに始まっており、教育の現場からは、生徒さんたちがさまざまな使い方の習得に向けて意欲的に取り組んでいる、とういうれしい報告も受けています。

多くの思いをつなぎ赤い橋が復旧 新たな心の架け橋に

台風19号によって一部落橋した上田電鉄別所線の「赤い鉄橋」が今年3月復旧し、全線で運行を再開しました。国や県への迅速な働きかけが早期復旧の起点になったそうですが、その経緯と今後についてお聞かせください。

台風19号が接近したのが2019年10月12日。翌13日朝に千曲川橋梁の橋台が流出し、鉄橋の一部が落橋しました。

いうまでもなく別所線は、通学・通勤、買い物、通院などの重要な移動手段であると同時に、教育・文化・景観・環境・観光といった側面においても、上田市にとって欠くことのできない大切な財産です。くわえて赤い鉄橋は、100年もの間、多くの人に親しまれてきた市のシンボル的存在でもあります。

当初から「なんとしてでも復旧しなくては」という強い思いと覚悟で臨みました。

災害発生後、すぐに地方連絡調整会議を開いてどのようなスキームで進めるべきかの検討を開始し、県や国に働きかけて多くの方のご理解とご協力をいただきながら、復旧への道筋を立てていきました。そして10月20日には当時の安倍首相が県内の視察に来られ、11月4日には赤羽国土交通大臣にも現地視察に来ていただくことができました。

台風19号災害は、2016年の熊本地震以来、全国で2例目となる大規模災害復興法の「非常災害」に指定されました。

非常災害に指定された場合、国と地方自治体が事業主体となって、復旧のための事業費を折半するのが一般的です。

一方で、国の普通交付税措置があれば、事業費の大半を実質上、国に負担してもらうことができます。ただそれには、上田市が橋梁を公有化して復旧の事業主体となることや、市が責任をもって保守や経営を行なっ

ていくことなどが前提条件になります。

今回の総事業費は8億6680万円。たとえ折半であっても4億円超の金額は市には荷が重すぎる。かといって復旧を諦め、この先ずっとバスで代行するにも限界がある……。

悩んだ末、今回特別に「鉄道の上下分離（経費の負担を軽くするため、列車の運行と鉄道インフラの維持管理を担う主体を分ける仕組み）」によって、線路全体ではなく鉄橋だけを上田市の所有にする、という選択をさせていただきました。

つまり国からの要件を受け入れることで、通常の補助制度を大きく上回る97.5％の事業費を国に負担してもらえるようにしたのです。この決断によって市の負担は全体の2.5％の2000万円余で済むことになりました。

もちろんこの背景には、赤い鉄橋を元の姿に戻してほしいという市民の声、再建を願うたくさんの署名や募金などがあり、復旧への力強い後押しとなりました。

これからも赤い鉄橋は上田市民の心の拠りどころ、千曲川の左岸と右岸をつなぐ心の架け橋であり続けるとともに、日本遺産をはじめとする新しい観光事業の重要な交通手段になっていくはずです。

本当のスタートはこれからです。大切な税金を使ってでも赤い鉄橋を残して良かった……そう市民の皆さんに実感していただけるよう、保守保全と経営改善に尽力していきます。

統合のクリーンセンターが一歩前進 環境アセスメント着手へ

市長就任前からの懸案事項であり、長らくこう着状態にあった「資源循環型施設」が、「環境影響評価」（＝環境アセスメント。環境に大きな影響を及ぼす恐れのある事業について、環境への影響を予測評価する手続きのこと）に向けてようやく動き始めました。経緯と今後について概要を教えてください。

資源循環型施設については、市政の最重要課題として相互理解の対話を大切にしながら取り組んできました。昨年11月、地元の資源循環型施設建設対策連絡会のご理解をいただいて、環境影響評価の手続きがスタートし、大きく前進させることができました。この8月には、長野県に対していわゆる「配慮書」を提出させていただいたところです。

また、資源循環型施設の建設予定地となる清浄園の移転先、南部終末処理場での「し尿前処理下水道投入施設」建設についても、地元・下之条自治会から同意を得ることができています。

資源循環型施設の建設については、これまで幾度となく関係自治体に向けての説明会や話し合い、サテライト市長室などを行なってきました。

150軒以上ある地元の皆さんのお宅を一軒一軒訪ね歩き、説明会の案内状を直接お渡ししながら、「もし説明を聞いてくださるなら、参加していただけませんか」とお願いをして回ったこともあります。

市長就任以来ずっと、地元自治体の皆さんとの信頼関係を構築できるよう心がけ、問題解決のための努力をしてきたつもりですが、そうした日々の積み重ねが今回の進展につながったとしたら幸いです。

今後は、環境影響評価の手続きと並行して、地元自治体の皆さんとまちづくりの観点に立った振興策などについて話し合いを進め、建設合意に向けてのご理解を得ていきたいと考えています。8月にはそのための資源循環型施設整備協議会を設立し、安心・安全な施設の実現と地域のまちづくりについて定期的な話し合いを開始しました。

ただ今回の環境影響評価は、まだほんの第一段階に過ぎません。ここから評価に3～4年、建設に3年ほどを要し、完成までには最低でも8年程度かかると考えられます。それまでは、稼働中の上田クリーンセンターを維持しなければならないという課題も残ります。

上田市はこれまで、耐用年数を過ぎたセンターの負荷を軽減し、できるだけ長持ちさせるために、ごみの分別や減量にさまざまなルールを定めてきました。そのことが市民意識を高め、上田市を全国有数のごみ分別の模範都市へと押し上げてもきました。

私が市民の皆さんに心よりお願いしたいのは、施設建設を他人事ではなく自分事として捉え、何ができるかを前向きに考えていただきたいということです。

資源循環型施設の建設では、決して一部の地元自治体だけにご負担をお願いするようなことがあってはならないと考えています。施設建設を早急に望む声があるのも重々承知していますが、地元の皆さんの「思い」を置き去りにしたまま建設を急ぐことはできません。

施設建設は、地元住民の皆さんの「思い」をしっかり受け止め、地域社会における市民相互協力を得たうえで実現されるべきものではないでしょうか。またそうした相互理解がなければ、たとえどんなに立派な施設が完成したとしても、本当の意味での問題解決にはならないと思うのです。

市民の皆さん全員の力を結集することができて初めて、検討中の生ごみ堆肥化施設や、将来目標であるゼロカーボンシティの実現、さらにはその先の持続可能なまちづくりにつながるものと信じています。

上田ワインプロジェクト始動 ワインの銘醸地を目指す

「上田ワインプロジェクト」が新たに始動しましたが、どのような目的でスタートしたのでしょうか。

上田市とキリンホールディングス、メルシャンなどが2021年6月に立ち上げたプロジェクトです。

市とマルチステークホルダー（課題解決のカギを握るさまざまな立場の組織や個人）が連携し、地域の特産であるぶどうとワインを融合させることによって、上田ならではのワイン文化を醸成し、豊かな地域と産業の活性化をめざします。

今年度の1つ目のテーマは、人材の発掘と育成です。市職員をはじめ、市内外からの人を対象として、将来ワイン産業の核となる人材を育成していきます。

2つ目は、千曲川ワインバレー特区連絡協議会との連携を図ることです。

上田市、小諸市、千曲市、東御市、立科町、青木村、長和町、坂城町の8市町村は、千曲川ワインバレー（東地区）構造改革特区に認定されています。

特区に認定されると、年間醸造6000リットル以上という枠が、2000リットルにまで緩和され、小規模ワイナリーでも開業しやすくなります。また広域認定を受けているので、複数市町村にわたる広い地域のぶどうを原料として使用することも可能です。2021年には佐久市もここに加わる予定で、周辺との連携がさらに進んでいくことになるでしょう。

上田市の「シャトー・メルシャン 椀子ワイナリー」が「ワールド・ベスト・ヴィンヤード2020」において世界第30位に選出されましたね。

2020年度のノミネートが1800以上、その中でベストアジアにも選出されているので、まさに快挙です。今回の受賞はワイナリーとしての景観の素晴らしさ、ワインツーリズムを楽しめる設備やプログラムの充実などが評価されたものと聞いています。

近年ではワインそのものだけでなく、ヴィンヤード（ぶどう畑）が観光の目的地になりつつあります。上田市もワインツーリズムを楽しめる魅力ある地域となれるよう、千曲川ワインバレー特区連絡協議会と連携して、さまざまなイベントを企画・開催していきます。

ちなみに昨年度はセブン＆アイ・ホールディングスと協力してアリオ上田で千曲川ワインバレー（東地区）ワイン大販売会を実現しましたし、今年の秋には、シャトー・メルシャン椀子ワイナリーのイベントと連動して、多彩な連携事業を実施しようと検討しているところです。

これからワインの銘醸地・上田として、市民が誇りをもち、たくさんの人が訪れてくれるまちをめざしたいと思います。

地域の魅力を再構築して 歩けるまち、活力あるまちづくりへ

コロナ禍でテレワークが普及し、都市部に住むことの必然性が薄れたいま、地方都市への移住を検討する人も増えています。

こうした時代の流れを受けて、どのようなグランドデザインを描き、将来どのようなまちづくりをしたいとお考えでしょうか。

おっしゃる通り、コロナ禍によってこれまでの価値観や暮らし方は大きく変わりました。

コロナ以前は、職場に近い都市部に住居を購入し、便利に暮らすライフスタイルが好まれる傾向にありました。これまで一部の富裕層にしか許されなかった二拠点居住や移住ですが、テレワークの普及によってこれからは、普通の人でも選択できる時代になっていくでしょう。

そうした地方都市への移住を検討している人たちの受け皿になるためにも、魅力あふれる市のグランドデザインを構築したいと考えます。

上田市は本当にポテンシャルの高いまちです。新幹線・上田駅と高速道・上田菅平インターを擁し、東京から新幹線で1時間半、車で2時間半とアクセスが容易です。

いろいろなアクティビティが楽しめる菅平高原や美ヶ原高原、千曲川といった雄大な自然に囲まれ、全国有数の日照時間を誇り、農産物などの特産品も豊富です。

良質な温泉や多くの寺社、上田城や真田一族、信濃国分寺を起点とする新たに認定された日本遺産まで、歴史文化遺産や観光ポイントにもこと欠きません。

都心への通勤圏内で、便利に暮らせるわりに里山が近く、豊かな自然環境のなかでもスマートに暮らせるのが上田市の特性です。

この地域の特性を生かしながら、まちなかの回遊や市内の周遊へとつなげ、人を呼び込むことで、まちづくりや観光の資源として活用していきたいと考えています。

これはあくまで個人的なイメージなのですが、たとえば上田駅前には、北に向かって太郎山まで真っ直ぐのびる、なだらかな坂道があります。この通り沿いを画期的に再構築

すれば全国からも注目される特徴あるまちがつくれるのではないかと思っています。

たとえば建築家とのコラボレーションによって、空き家をリノベーションして魅力的で快適な居住環境を提供したり、デマンドバスやシェアサイクル、5Gなどを活用することで、まち全体をスマートシティ化し「歩けるまち」にしたり……。

そうすれば、地域特有の景観や雰囲気を五感で感じることができるでしょうし、自分の住んでいるまちの歴史文化や良いところを再発見するきっかけにもなるでしょう。

実際に武石地域ではデマンドバスも試運転されていますが、こうした交通網が確立していけば、車の免許をもたない人や高齢者にもやさしく、地元ワインや銘酒を楽しみながら歩いて回れるまちになるでしょう。

さらに、こうした魅力を全国へ発信して移住を誘致すれば、強力な動機付けとなって、二拠点居住やIターン、企業といった関係人口を含めた人流増加が見込めるはずです。軽井沢ほど土地や物価が高くなく、雨や雪の少ない生活しやすい気候で、医療や教育施設なども充実している。スマートに暮らしながら畑や菜園づくりも楽しめる。ちなみに今年スタートした殿城のクラインガルテンは、定員の5倍の応募があったほど大人気でした。そんな上田市の魅力を見直して再定義し、地域特性を生かしたまちづくりをしていけば、市民にとって暮らしやすいまち、誇れるまちになるだけでなく、移住者にとっても最良の受け入れ先になれるはずです。これほど恵まれた地方都市はなかなかありません。

本当に厳しい時代ではありますが、こんな時だからこそ「市民力」を結集し、創意工夫によって地域振興できるよう全力で取り組みます。そのプロセスには、人と人がつながり経済を広げるための気づきやヒントが必ずあるはずです。市民の皆さんのさらなるご理解、ご協力を心よりお願い申し上げます。

インタビューを終えて

これまで外から見ただけではわかりにくかった市政の実際が、ぼんやりとですが見えてきたように感じました。座右の銘に「為政以徳」とあるとおり、真摯に、謙虚に市政へ取り組まれている姿勢が印象的でした。お忙しいなか、ありがとうございました。

ReBRANDING

上田再構築プロジェクト

山、川、高原など豊かな自然に囲まれ、歴史文化遺産や温泉資源に恵まれた上田市。
伝統工芸、農産物など特産品が豊富で、芸術や映画のまちとしても知られます。
そんな各地に散りばめられた魅力を、再発見して磨き上げ、点から面へとつなぐのが上田再構築。
住んでよし、訪れてよしの安心で持続可能なまちをめざし、人と地域をつないでいこう。
その先にはきっと、新たな未来が待っています。

2020年1月～2021年8月 上田市政報告

1 新型コロナウイルス感染症対策

(1)市内小中学校の臨時休校、保育園等の登園自粛、市有施設の休館措置等
(2)上田城千本桜まつりをはじめとする、各種イベント・行事の中止
(3)国の「緊急事態宣言」発令を受け、新型コロナウイルス感染症上田市対策本部(法定)を設置('20年4月7日)
(4)健康推進課外局に「新型コロナウイルス感染症対策室」を新設('20年4月)
(5)市議会定例会のほか、'20年5月(2回)及び7月に臨時会を開会し、必要な予算措置

(6)長野県からの委託を受け、「上田地域検査センター」を設置('20年5月26日)
(7)長野県新型コロナウイルス感染症・感染警戒レベルが、上田圏域でレベル4に引き上げられ、「特別警報」発令('20年8月28日)
(8)「コロナ禍を、みんなで共に乗り越えよう!」共同宣言('20年10月23日)
(9)上田市旅館・ホテル業事業者宿泊予約キャンセル等支援金支給を発表('21年3月26日)
(10)県と連携して「信州の安心なお店応援隊」飲食店巡回啓発('21年4月23日)
(11)上田市売上減少事業者支援給付金の申請受付開始('21年6月1日)
(12)県の感染警戒レベル5引き上げ「特別警報II」発令に伴い新型コロナウイルス感染拡大防止に向けた街頭啓発('21年8月6日、8月13日、9月3日、9月22日)

2 令和元年東日本台風災害からの復旧・復興

(1)上田電鉄別所線千曲川橋梁(赤い鉄橋)及び付帯施設を上田市が公有化し、復旧工事を本格化('20年1月)
(2)上田市復旧・復興対策本部設置('20年1月20日)、引き続き全庁体制で復旧に取り組む
(3)被災した千曲川流域12市町連携による復興花火の打ち上げ('20年11月3日)
(4)別所線の赤い鉄橋が復旧し、全線で運行が再開('21年3月28日)

3 資源循環型施設建設に向けた取組が大きく前進

(1)資源循環型施設建設の基本方針を策定('20年8月)、住民説明会を開催
(2)環境影響評価の実施について、資源循環型施設建設対策連絡会から同意を得る('20年10月)
(3)南部終末処理場内にし尿前処理下水道投入施設を建設する計画について、地元下之条自治会から同意を得る('20年11月)
(4)資源循環型施設建設に係る環境影響評価(配慮書)を公表('21年8月10日)

4 「レイラインがつなぐ『太陽と大地の聖地』～龍と生きるまち信州上田・塩田平～」と題したストーリーが、文化庁の日本遺産に認定('20年6月19日)

5 第二次上田市総合計画「後期基本計画(後期まちづくり計画)案」(令和3年度～7年度)を策定し、'20年12月市議会定例会に上程

6 市民総参加のまちづくりに向けて

(1)「上田市手話言語の普及及び視聴覚障害者等の意思疎通手段等の利用促進に関する条例」(通称:うえだ手話言語・情報コミュニケーション条例)制定('20年7月1日施行)

7 誰もが住みやすい環境のまちづくりに向けた道路網の整備

(1)主要地方道別所丸子線「柳沢バイパス」開通('20年3月19日)
(2)三才山トンネル無料化('20年9月1日)
(3)国道254号「平井バイパス」一部供用開始('20年9月1日)
(4)国道18号上田バイパス第二期工区が進捗
(5)国道18号の渋滞緩和に市道「五反田新屋線[清浄園～下塩尻]」開通('20年12月21日)

8 産業振興、シティプロモーション、スマートシティ化、移住交流の推進

(1)「シャトー・メルシャン 椀子ワイナリー」が、「ワールド・ベスト・ヴィンヤード2020」で日本初の30位('20年7月)。また同アワード2021では日本で唯一の33位に選出('21年9月)
(2)上田が舞台のドキュメンタリー映画『一献の彼方に～酒造好適人々～』が海外映画祭で高評価。また、映画『兄消える』(信州上田フィルムコミッション)が、ジャパン・フィルムコミッション主催の「JFCアウォード」で優秀賞を受賞('20年8月7日)

(3)「中小企業・小規模企業振興条例」制定('20年4月1日施行)
(4)デジタルコミュニティ通貨実証実験としてまちのコイン 上田「もん」スタート('21年2月1日)
(5)スマートシティ化を通じて上田市が未来に向かって持続可能な都市としてさらに発展していくため、「上田市スマートシティ化推進計画」を策定('21年3月)
(6)「信州上田クラインガルテン 眺望の郷 岩清水」竣工('21年4月9日)
(7)上田市とキリングループで「上田ワインプロジェクト」立ち上げ('21年6月25日)
(8)上田市・千曲市広域シェアサイクル社会実験開始('21年7月1日)

9 子育て支援、健幸都市の実現に向けた取組

(1)健康推進課の外局に地域医療政策室を新設('20年4月1日)
(2)「第2次上田市子ども・子育て支援事業計画～上田市未来っ子かがやきプラン～」策定('20年3月)

10 教育、文化・芸術、スポーツの振興

(1)「ウエダアカボウクジラ」全身骨格化石、浦野川で発掘調査('20年2月～3月)
(2)上田市交流文化芸術センター運営検証委員会から、交流文化芸術センターの運営について「検証結果」の答申('20年2月14日)
(3)2020パラアルペンスキー競技大会アジアカップが菅平高原で開催('20年2月13日～2月16日)
(4)信州上田ふるさと先人館開館('20年6月29日)
(5)第27回「全国山城サミット上田・坂城大会」('20年10月31日、11月1日)
(6)国の登録有形文化財に、新たに上田聖ミカエル及諸天使教会堂、小泉家住宅店舗兼主屋の2件が登録('21年2月)
(7)上田西高等学校硬式野球部が、第93回選抜高等学校野球大会に初出場('21年3月23日)。また、同硬式野球部の髙寺望夢選手が、阪神タイガースからドラフト7位指名を受け、入団
(8)長野大学に大学院総合福祉学研究科開設('21年4月3日)

11 持続可能な地域づくりに向けて

(1)2021年3月市議会定例会初日に「上田市気候非常事態宣言 ～光・緑・人の力で目指す2050ゼロカーボンシティうえだ～」を表明('21年2月19日)
(2)「上田市気候非常事態宣言 ～光・緑・人の力で目指す2050ゼロカーボンシティうえだ～」の実現に向けて「上田市地球温暖化対策地域推進計画」策定('21年3月)

12 地域自治拠点の竣工、行政サービス

(1)武石地域総合センター開所式('21年3月29日)
(2)上田市新本庁舎竣工式('21年4月17日)
(3)上田市防災ポータルサイトを開設('21年7月1日)
(4)わかいこ はたらこ プロジェクト(地域若者等定住就職支援事業)を発表('21年8月1日から募集開始)

YouTube

上田市行政チャンネル

市長施政方針・提案説明や新型コロナウイルス対策関連はこちらをご覧ください

ご挨拶

後援会会長
森 浩二
(上田病院理事長)

市長就任以来、土屋よういちは、常に皆さまの声に耳を傾け、共感力と市民力でつながるまちを目指してまいりました。おかげさまで懸案の資源循環型施設建設に向けて、少しずつですが解決の糸口が見えてまいりました。またコロナ対策についても全力で取り組んでおります。集会など開催しにくい状況ではありますが、後援会報を通じて日頃の活動についてご報告してまいります。よろしければお近くの方とも情報共有していただければ幸いです。
これからも土屋よういちをご支援いただけますよう、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

土屋陽一後援会(新陽会)事務局
ホームページ
http://yochan41.com
facebookもご登録ください
土屋陽一サポーターページ

Tsunagu [つなぐ] OCTOBER 2021 土屋よういち後援会報 vol.01
土屋陽一後援会(新陽会)事務局 〒386-0011 長野県上田市中央北1-1-29 TEL/0268-75-0026 Email/shinyoukai@yochan41.com